

令和3年度第2回三重県ひきこもり支援推進委員会 概要

日 時：令和3年9月27日（月）15時～17時

場 所：三重県勤労者福祉会館 5階 職員研修センター第1教室

出席者：別添出席者名簿のとおり

【概要】

1. 開会

- 「三重県ひきこもり支援推進計画」（仮称）骨子案及び、令和3年7月から8月に実施した民生委員・児童委員等を対象にしたアンケート調査結果の概要について、事務局から説明。

2. 主な意見

- (1) 民生委員・児童委員等を対象にしたアンケート調査結果について

【速水委員】

- 民生委員・児童委員へのアンケート調査については、30代から50代の年代は民生委員が接触する機会が割合少ない中で、高齢者のいる家庭でひきこもる息子さんや娘さんがいるかどうか、民生委員・児童委員が普段の活動において知り得ていた情報を報告してもらう方法で実施した。結果として、ひきこもり状態にある方がこれだけ存在することを把握できただけでも良い資料であり、これからの活動に役立てていきたい。

【平井委員】

- 伊賀市でも2010年に同様の調査を行ったが、その当時と調査結果の傾向が非常に似ており、10年前からそれほど変わっていないと感じた。民生委員には様々な役割があるが、特に困っている方を見つける役割が非常に大きいと思う。その意味では、これだけの方を把握していただいているということは非常にありがたい。

- (2) 「三重県ひきこもり支援推進計画」（仮称）骨子案について

【浦田委員】

- 計画骨子案の冒頭、計画策定の趣旨の部分について、「ひきこもりは、特別なものではなく、誰にでも起こりうる『状態像』であり」というところは、文章の最初なのであまり複雑な表現ではなく『ものであり』と簡潔にしたほうが読みやすいのではないかと。
- ひきこもりの定義について、大きめで広義の定義のものになっている。今後、様々な施策や事業を実施していく際には、事業内容や趣旨に沿ってある程度はっきりとしたものにしていく必要があると思う。
- 新たな居場所づくりの検討において、「生活困窮者自立相談支援事業」の中で、例えば

最低賃金を下げた形で就業訓練を実施できる制度を上手く活用しながら、ひきこもりの方が利用した場合、何らの助成金を入れるような形にして支援するという体制を作るのも、面白いやり方ではないか。ただし、就職に至る段階にかなり近づいた人が前提になってくると思うので、アウトリーチとか、まだ相談に来ていない方をどうするかが非常に大きな問題である。

【野村委員】

- 今回のアンケート調査で、ひきこもりになったきっかけが不登校である事例が少ないことについて、学校も不登校に対する調査として、令和元年度に「児童生徒の問題行動不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」を実施しているが、この結果と照らし合わせて思ったことをお伝えする。
- 不登校の要因として考えられる状況について、「学校・家庭・本人」に係る状況の大きく三つに分けている。小・中・高合わせて、1つ目の「学校」に係る状況では、いじめを除く友人関係をめぐる問題が多い。2つ目の「家庭」に係る状況では、親子の関わり方が課題であることが多く、3つ目の「本人」に係る状況では、無気力、不安が多くなっている。そういう点で、やはり人間関係に関する課題がひきこもりの要因になっているのかもしれないと、今回の調査結果を聞いて思った。
- 今年度からスクールソーシャルワーカーを29市町に配置し、県立高校は22校配置という形になっているが、毎週学校に行くことができている訳ではなく、マンパワーの問題で「点」での支援になっている。複雑な人間関係の課題を持つ生徒やそれを取り巻く家族の相談に乗ってほしいと思うと、やはりタイミングが重要で、「点」の支援ではなかなか結果が出せないジレンマが生じているのが現状である。
- 医療につなぎたいが、つなげられない状況が子どもたちにある。二次障害として精神疾患の予兆が出ている児童・生徒らの姿を実際目の当たりにする。色々な病院の事情があると理解しているが、児童精神科医の数が非常に少ない現状がある。全国的にも同じだと思うが、予約をしても1年待ちといった状況のため、なかなか医療につなぐことができない。
- ひきこもりを広い意味でとらえたとしても、色々な関係機関の問題もはらんでいるので、そういうところを1つ1つひも解いて、みんなで関わっていければありがたい。

【平井委員】

- 一つの機関や団体だけでこの問題は解決できないだろうと思う。とりわけ、民生委員が発見し、関係者たちで本人に関わり、支援の輪を作っていくことが必要である。県が主導して取り組んでいただくのは非常にありがたいが、市町で細かくその人を中心としたネットワークを作り、全く違う仕事をしている方々が本人を中心として支援の輪を広げていくことが本当に大事。

【倉田委員】

- 鈴鹿厚生病院で精神障害者のアウトリーチ推進事業を継続して行っているが、こういう事業は、経済的な視点、人、もの、金、いわゆる活動資金、ある程度の予算配分がないと切れてしまいがち。実際、国 10 分の 10 の補助で、平成 23 年から精神障害者のアウトリーチ事業があったが国の資金が打ち切れ、3 年で終わってしまった。37 病院に委託されていたが、結局 7 病院しか残らなかった。
- 3 年間でどれだけの成果が出せるかによって、次の予算につながるのではないか。この事業を継続するために、まず 3 年間で何をやらなくてはいけないのか、ある程度の結果なり費用対効果的なものが数字としてどのように表れれば、その次の 3 年に生かされるのかというような議論も必要である。予算がなくなったので終わりましたとなると怖いので、何らかの戦略的なプラン、計画を練っておかなければならないと感じている。

【伊藤委員】

- いなべ市では、本年 4 月から古い幼稚園を改修してひきこもり専用の居場所をつくった。まだ半年に満たないが、現在実人数で約 15 名がこの居場所を利用しており、5 名の方がご家族、10 名の方が福祉関係、地域包括支援センターや生活困窮者自立支援機関の相談員等福祉関係者の方から紹介されて、社会に出るための一つのステップとして利用されている方が多い。当初予定していなかったが、中学生が夏休みに利用した実績がある。
- 当初は利用者をいなべ市の方に限っていたが、近隣の市町の方からも見学や利用を希望される方があり、順次対応している。
- 当事者からの主体的な相談には至っていない。当事者が支援を望まない場合があるので、この辺りが難しいと感じている。
- 骨子案について、初期の支援では家族に対する支援が中心と読み取れるが家族がいない、家族の支援が望めない、当事者だけしかいないというパターンもあるので、いかにして関係を構築し、支援に結び付けられるかが重要ではないかと感じている。

【堀部委員】

- 現代では、学校や家庭などでも、「問題を見つけて対策を行う問題解決型の会話をする事」が良いことであると思われている点が一番の問題である。家族や職場もそうだが、「傾聴する」というスタンスが大事であると理解する必要がある。いきなり答えを求めるといったような会話が、その子たちのところにあるべき姿を勝手に作ってしまい、それとのギャップでみんな苦しんでいると思う。
- 今後取り組みたいことは、元ひきこもり当事者がひきこもりの家族のところへ訪問し、支援の輪を広げていく活動が必要ではないかと感じている。ひきこもり当事者OB会

を行っているが、働き出してもいまだに尾を引いている人が多い。OB会に来て、自分の苦しいことを話すことにより少しほっと安心して帰る。次回にまた来て、自分の苦しいことを話して帰っていく、そういうことの繰り返し。

- そこで、元ひきこもり当事者が逆に支援側に回り、自分の苦しかったことを話すことによって、今苦しんでいる子たちを助けていく、そういう輪を広げていくことが、ひきこもり支援の一つの形ではないかと思っている。

【川瀬委員】

- 桑名市ボランティア連絡協議会の活動で、桑名市社会福祉協議会が行う生活相談支援室に関わっているが、そこにひきこもり当事者の方が登録している。その人達に、毎年ボランティア連絡協議会のイベントや大きな事業のお手伝いをしてもらっている。
- 最初は顔を合わすのも嫌そうに見えたが、徐々に集まってきてもらうようになり、ボランティア連絡協議会にとっても、その人たちに手伝ってもらって感謝の気持ちで一杯である。そして、やはり本人たちにも相通じるところが徐々に出てきているのかなと思っている。その人たちは本当に一生懸命取り組んでいて、僕達がいなかったらできないやろという様子で、喜んで出てきてもらっている。
- そのうちの一人が「僕、もしかしたら仕事につけるかも」と言った一言が本当に嬉しくて、「頑張らんでもええから、仕事に行ってもいいけど、ここにも出てきてね」と伝えた。資格もなく、一般の方が行うボランティアの取組が、ぜひとも地域で大きな力を出せたらいいなと思っている。

【西井委員】

- 居場所をしている現場の感覚だが、自殺のリスクが割と高いと感じている。また、情報発信・普及啓発について、全世帯にチラシで周知できないかなとか、若年層にはチラシではなく、SNSなど多様なツールを駆使してひきこもりの方とつながって相談できるようになればいいと思う。やはり社会に出てくるまでが大変なので、情報発信・普及啓発に力を入れていただきたいと思っている。

【西岡委員】

- 「市町の相談窓口がわからない」という意見があるので、まだまだ市町の相談窓口の周知がうまくいってないことについては反省すべきであると思う。
- 「当事者にどう対応しているのかわからない」という意見があったが、ひきこもり支援に関しては、市町として講座や講演会を実施できていないので、今後しっかり地域へ発信していくことで、少しでも地域で支援していただける方を養成していくことが必要であると考えている。
- 居場所づくりを検討しているが、誰が話を聞いてくれるのかという体制づくりは、市町

として財政的支援もないとなかなか人員配置も難しいと思う。そういう部分はやはり国や県の補助金なり支援があると心強い。

【楠本委員】

- ひきこもり地域支援センターでも3年前、平成30年の7月から8月にかけて、ひきこもりの支援機関158機関、市町の福祉担当、保健担当、それから社会福祉協議会、障害者相談支援センター、生活困窮の部署、就労支援機関、家族会を含む民間団体、アウトリーチを行っている医療機関、自閉症発達支援センター等を対象に調査を実施した。
- 支援機関別にみると、わりと高齢の方をたくさん把握しているのが、市町や社会福祉協議会、生活困窮の部署等であった。また、他機関との連携については、多くの連携がされており、社会資源が少ないので連携せざるをえないという回答もあった。連携先としては、市町の窓口、社会福祉協議会、それから生活困窮者の自立相談支援機関、医療機関などが多かった。
- ひきこもり支援における課題で一番多かったのが、家族や本人以外からの相談の場合、介入の方法が難しいこと。例えば、人口が少ない地域では、家族が相談に行くのも難しく、親戚や知人の方に相談に行ってもらうことも多いと聞く。また、精神疾患が疑われるが受診につながらない、支援に関する相談指導をしてくれるところがない、ひきこもり状態の方を対象とした居場所や家族会等の社会資源がない、どのように社会資源につないでいいかわからない、家族からの相談に対して助言する方法がわからないなどという課題もあった。
- 相談につながらないケースが実は多いというご意見があったが、当センターの調査結果では、相談につながっているけれどもそれをよりよい解決というか、当事者本人やその家族が望む支援に結び付けることが難しいという課題もあった。
- 先ほど予算の裏付けの話も出たが、どの段階においても取り組んでいくとなると、予算的に難しい問題があるが、きめ細かい支援を行うにはマンパワーが重要になると感じている。
- 障がい福祉、介護等の分野では、「地域包括ケアシステム」という国の概念に沿って、体制づくりをめざすという見取り図が出ている。そのような中、ひきこもり支援だけを特別に行うことは、予算の議論もあり長続きするとは思えないので、今できることをして普通の業務に織り込むようにしていくことが、ゆくゆくを目指すところではないかと思う。

【野村委員】

- 西井委員から若年層がSNSを使うという話があったが、9月に三重県に緊急事態宣言が出され、学校が変則的な動きになっている。その中で、小中学生はiPadを家に持ち帰り、高校生は家のパソコンでみんなとつながる形で授業をしている学校もある。

例えば、担任と一対一で話すこともできる。それで、不登校で自宅に行ってもなかなか会えなかった生徒が、画面上で会えるようになったというケースがいくつかあって驚いている。外には出られないがつながるという方法が今あることをすごく実感した。それこそ「DXの推進」の視点について、年齢層は限られてしまうが、いい方法だなと思った。

【齋藤委員】

- ひきこもり当事者を対象に zoom による支援を続けており、非常に利便性が高いこともあり、窓口まで来なければ相談を受けられない状況は、現状では時代遅れと言ってもいいかもしれないと思っている。そういったリモートの活用もぜひ考えていただければ、相談の可能性はずっと広がるのではないかと感じている。
- 多職種で連携することは非常に素晴らしいが、連携の仕方がまずく単純に次の機関を紹介して終わりになってしまうと、いわゆる支援の谷間に落ち込んで途切れてしまうことがある。これを防ぐためには、支援者が支援機関を紹介してそれっきりにしない、つながるまでは相談を継続するという姿勢を維持しないと、谷間の問題が付きまとい、せっかくの連携が無駄になるかもしれないという懸念がある。
- 野村委員から学校現場の話があったが、不登校人口はますます増え続けていて、ここ数年は毎年2万人ずつ増える状況で、おそらく2020年はさらに増えて20万人を超えるだろうと予測されている。文科省調査では、不登校人口の約2割が長期化するとされており、母集団としては非常に大きい。ところが学校現場での不登校対策が残念ながらまだ十分ではないこともあり、結果的に長期化する人がどんどん増えるということが起こっている。
- お願いしたいことは、学校の先生方が、不登校支援は卒業したらおしまいという意識を捨てていただく必要がある。卒業時点で学校に戻れなかったお子さんがいる場合は、彼らに対して学校側から利用可能な社会資源を情報提供したり、あるいは相談機関につながるとか、むしろ卒業時点でしっかりとやるのが望ましいと思っており、再登校に向けた努力も大事だが、再登校できなかった方に対するケアを学校現場でしっかりとやっていただきたいと常々感じている。
- ひきこもり相談に来ない方の場合には窓口を変えるという方法がある。我々の試みとして、ライフプランの相談、相続とか今ある生活費をどう運用すれば親亡き後もやっていけるかといった相談を、ファイナルシャルプランナーを講師として招いて講演会を開いたりしている。そういう名目だと相談もしやすいし、お金の話だったら当事者も参加しやすい。治療対象として扱われると嫌だけど、お金のことは自分に関わる問題で、相続対策とか全部重要な問題でそれをちゃんと話し合いたいというニーズがあるので、そういったお金の話ができる窓口があったほうが良いと感じている。行政が提供することは難しいかもしれないが、そういった紹介ルートがあると良いと感じている。

○私も茨城県笠間市でひきこもり支援に関わっているが、アウトリーチ支援を積極的に行っている。アウトリーチ支援を始めると困難事例が多く出てくるわけで、会いに行っても絶対に会えない、数年間訪問し続けても全く会えないケースもあるが、そういった困難事例を対象としたケース検討会を定期的にやっている。このケース検討会は、ボランティアの方やピアサポーター、あるいは多少専門家の方でやるにしても、zoom でもいいから集まってケース検討会を開くことは非常に大事なことで、ピアサポーターの方やボランティアの方にとって学ぶ機会になる。学習を兼ねたケース検討の機会によって、その支援者が孤立することを防げるので、これから支援に本腰を入れていくのであれば、ぜひともこの定期的なケース検討の場を設けてほしい。

【伊藤委員】

○いなべ市では、去年市の広報紙にカラー刷りでLINE相談しますよという周知を試みたが、結局いなべ市の人口4万5,000人だが、相談はほとんどなかった。おそらく当事者はそういう広報誌はなかなか見ないんだろうなと実感したところで、いかにして当事者や家族の方にお伝えしていくかは、非常に難しいと、今日の議論を聞いていても感じた。

【平井委員】

○私どももネスト（居場所）をやり始めた際、ひきこもりの人たちに私たちの情報をどう伝えるかという議論をした。通常的手段では無理だろうと考え、喫茶店やスーパーマーケットに名刺大のチラシを置かしていただき、それをご家族やご本人が手にしてつながりができた。もっと大きかったのが、やはり民生委員さんあるいは地域包括支援センターの方から情報が入るルートは非常に有益だったと感じている。

【浦田委員】

○計画の成果（目標）について、「支援した人の数」や「就職した人の数」とすることは、ひきこもり支援と馴染まない。どちらかという、「つながること」や「連携が広がっていくこと」を大事にする成果（目標）でないと、ひきこもり支援の本質につながっていかないという気がしている。ひきこもりの方がつながり続ける、連携し続けるとか、そういうもう少しベース部分の成果を評価してもらいたい形がいいのではないか。

○こころの健康センターの予算もぜひしっかりつけていただければありがたい。新しい知事は、「思いやり」とか「ひきこもり支援を進めます」みたいな指針を出していたかと思うので、ぜひその辺をお願いできればと思う。

【楠本委員】

○当センターに予算を決める権限はないが、県内でひきこもり地域支援センターは一つ

だけでなく、複数置くことも制度上できる。これから県がひきこもり支援を広げていくときであり、当センターとしてはこれまでの蓄積を、ぜひ関係機関の皆さんに情報共有しながら、さらにより良い支援になるよう協力していきたいと思っている。

3. 閉会

【中村副部長】

- 今回の民生委員・児童委員への調査で 1,000 人を超えるひきこもりの方がいることがわかった。また、国の調査からは、県内に潜在的に 1 万人を超えるひきこもりの方がいると推計される。精神保健分野の専門的な相談支援も向上していく必要がある。また、身近な地域の市町単位で、どのように相談支援窓口や居場所をつくり支援していくか、どのように人材を養成していくか、県としても市町の皆さんと一緒に身近な地域で、まずは一時的にサポートできる体制づくりをしっかりと取り組んでいきたいと思う。
- 普及啓発については、まだまだひきこもりの人がいることを家族以外の支援者に相談できない状況にあるが、認知症サポーターの取組も参考になる部分があると思っている。
- これからも皆さんから色々な意見やアイデアを聞かせてもらいながら、より良い計画を作成し、来年に向けて予算議論もしっかりとしていけたらと思う。